FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2000.3.31
No.37

元米国軍人旧蔵の写真コレクション（福井空襲の光景）

特別展「モノから学ぶ」を終えて

いま改めて博物館を考える

笠松雅弘

そもそも「博物館」とは何なのか？
社会にどのように役立つ施設であり、組織なのか？
この古くて新しい問題を改めて
考え直そうということから、
今回の特別展の企画検討がはじまった。
いまその特別展が終了し、ここに改めて
博物館をめぐるさまざまな問題について、
現場の一人の学芸員の声として、
若干の意見を述べてみたい。

博物館を考えるために

博物館を理解するには、植物にたとえて考えてみるとわかりやすい。まずは、資料を調査し、収集するところが地下に張った＜根＞にあたる。つぎに集めた資料を分析し、研究するところが茎からのびる＜葉＞にあたる。葉が光合成で養分を作りだすように、単なるモノが重要な歴史資料へと生まれかわるところである。

そして、展示や普及活動が頂上に咲く＜花＞であたる。根と葉に支えられ、見る者の目や心にもっとも訴える部分ということになる。植物が＜根＞＜葉＞＜花＞をもって構成されるのと同様に、博物館も＜資料の調査・収集＞＜研究・分析＞＜展示・普及＞がそれぞれの役割、機能をはたして、健全な姿となるわけである。

ところがまた、人が花をもって植物を愛でるのと同様に、博物館も展示と普及活動をもって評価され、利用されることが多い。もっとも目立つ部分であるから、一面当然ではあるが、展覧会や普及行事のない博物館は、ともすると花の時期を過ぎた曼珠沙華のように、根も葉もない幻のような存在と化してしまう。それは、「いま博物館で何かやっていますか？」という利用者の問い合わせに対する「(常設展以外)何もやっていません…」という応答に、端的に表されている。

これは、日本の博物館の特徴といわれることでもあるが、活力のない常設展示がクモの巣がはったような状態になり、特別展や普及事業の開催でようやく入館者を確保するという体制ができあがっているからである。‘一度見たら終わり’の常設展示の弱さを、他の事業で

カバーしようというのであるが、このことが常設展示の墓場化をさらに助長するという、悪循環を生み出している。いまや常設展示は色も香りも失ったドライフラワーとなってしまっているのである。

博物館を考えるために

植物を愛し育てる人が日々根に水を与え、葉の手入れを怠らないように、博物館も＜資料の調査・収集＞＜研究・分析＞の力をぬけば、美しい花が咲くことはない。ときには隣りの花を摘んで活けることもできるが、それはやはりその場かぎりのものでしかなく、実をつけることはない。

本来、博物館の事業・役割というものは、各行事ごとの、あるいは年度ごとの短期間を設定して評価される側面と、もう一方で、かの有名な英国のミュージアム「ヴィクトリア＆アルバート」が自国の輸出品の質（工芸的価値）を高めるという壮大な構想のもとに開設されたように、まさに‘百年の計’をもって評価される側面とをもちあわせているはずである。短期間の利用者の数を指標にして一喜一憂することも必要であるが、長期間の見通しをもって評価する側面があることも忘れてはならないであろう。

博物館は、いま流行のテーマパークとは異なり、短期間にいくら技術や金銭を投じても中身の充実をはかることは困難である。間に合わせの造花を並べるのではなく、生きた大輪を咲かせるには、地中に根を張りめぐらせ、枝葉をのばして茂りをつくるための時間と環境（いわば、「歴史」と呼べるもの）が必要なのである。確かに３Ｄ映像やファンタビューなどの最新の機器や技術を駆使したバーチャルリアリティーは迫力がある。しかし、実物資料をどうみせるのか、という原点を見失っては、博物館は宙に浮いてしまう。昨今、博物館とテーマパークの質的な違いについて、もう少し深い議論を行う必要があると思う。

博物館を考えるために

いま国では博物館を独立行政法人にしようとする動きがある。文部省からサービス部門だけを切り離し、行政のスリム化をはかるというものである。暫定措置としていわば半官半民のかっこうとなり、まったくの独立採算制をとるわけではないが、事業赤字に対してはこれまで以上にきびしいチェックがまちうけている。この施策が博物館の運営にどのような影響を与えるかはまだ定かでないが、財政運営に苦心を要することはまちがいない。そうなれば、これまで以上に入館者数（採算性）を考慮した事業展開がなされることは必至である。はたして、文化事業の質の高さと採算性という二つの座標軸を、どのように重ね合わせていけるのか。これは、なかなかむずかしい課題である。

21世紀に向けて、経済発展の見通しがつかない状況下で、社会全体にリストラクチャリングが行われ、博物館にも大きな荒波がよせつつある。しかし、考えてみれば文化（事業）というものには、歴史的にみてもつねにスポンサーが存在した。富と権力が支え育ててきた部分が大きいことは否定できない。よって、今後はいかに市民がスポンサーとなってくれるかが生命線となるわけである。しかも、直接的な支援を求めることになるのである。テーマパークとは異なる博物館の固有の魅力とは何なのか？どうしても博物館は必要なのか？市民がこの問題をどのように受けとめ、対応してくれるのか。

ここにきて、市民社会における真の博物館づくりがようやくはじまるのかも知れない。もちろん、その結末には、選択肢としての廃止論があることを忘れてはならない。参考までに、いまや全国には1000館、さらに類似施設をあわせると3500館もの博物館ができあがっている。はたして、どれだけが本当に生き残れるのか。

博物館を考えるために

博物館における学芸員の役割についても考えさせられることが多い。いったい学芸員の専門性とは何なのか？現状では、資料調査から研究、そして展示、さらには教育普及の場で、じつにオールマイティーな能力が求められている。どれか一つの分野ですぐれていても、他の力が足りなければ博物館の運営には支障をきたすのが現状である。学芸員こそは、調査員であり、研究者であり、プランナーであり、デザイナーであり、教育者であり、またあるときは、カメラマンであり、解説員であり、運搬員であり、倉庫番であり、添乗員であり、サービスマンであらなければならない。業務の分業体制が整った欧米の先進博物館に比べ、日本の学芸員はまるで‘怪人20面相’のような活躍を期待されているのであり、マルチタレントが求められている。

しかし、その一方においては、日本では学芸員を評価するシステムができていない。学芸員が「雑芸員」とい

われるような、仕事の内実も知られていないことが多い。そのため学芸員の側も、まだ評価の対象となりやすい研究論文等に力を入れて、大学や研究機関などへ移る夢をいだくことになりやすい。いかに博物館の事業を充実させても、学芸員(研究者として)の評価にはなりにくいからでもある。学芸員が育つ環境もまだまだ整っていない。

「展覧会をしていないときは、ヒマでしょう？」「そんなときは博物館のなかで何をしているの？」という声をかけられることがよくある。これが、学芸員というものに対する一般的な理解のあり方なのかも知れない。多くの人びとが、先の「雑芸員」の奮闘ぶりを知らないでいる。マルチタレントを求められていることも知る由はない。しかし、いつまでも一人芝居を演じているわけにはいかない。この現実を何から突破したら良いのか、学芸員、そして博物館にとっては、切実な問題なのである。

博物館を考えるために

それでは、早急に解決法を考え出さなくてはならない。手段や方法はたくさんあるが、その一つの試みとして常設展示の改革がある。根と葉の<資料の調査・収集><研究・分析>を育成し、絶えず常設展示を生きた花として保つ方策である。根と葉の養分を汲み取って、百花繚乱をめざすのであり、<根><葉><花>の三位一体を実現させる一大改革といっても良いであろう。

そのためには、こう着した常設展示を柔軟なものに改善する必要がある。開館以来‘十年一日’のような展示のあり方を見直して、つねに<資料の調査・収集><研究・分析>の成果を反映する、新しい体制とシステムを作りあげることである。そのさい、ケースや照明、パネル等の展示器具はできるだけ可動式のものにし、極端にいえば、いつでも好きなときに更新できる自由な展示環境を整備しなければならない。

そうなれば学芸員も、これまで以上にうかうかとはしていられない。ただちに<資料の調査・収集><研究・分析>の成果が問われるのだから、業務にあたる緊張感が増し、やりがいも出てくるはずである。これまでの特別展と常設展との垣根はずいぶん低くなり、博物館ではつねに何かの新しい展示が行われていることになる。リピーターにとっても喜ばしいはずである。

ただし、これを実際に行うには、施設の改造を含め、たいへんな変革を伴わざるをえない。まずは何より、今日のような不況下に、経費の面でどれだけの理解と支持を得られるかが心配である。また、学芸員の負担もいっそう過重になることが予想され、それに見合った人員配置と職場環境の整備が望まれるところである。

ちなみに、当館ではリニューアルを機に、「フレキシブル展示」として導入の検討を進めている。たいへん責任の重いことであり、これこそ単なる思いつきでなく、長期間の見通しをもって取りかからなければならない大きな試みである。

博物館を考えるために

もう一つの試みは、展示を通して博物館の事業をアピールすることである。従来展示といえば資料を並べることに主眼が置かれてきたが、行為(空間)を再現してみせることも一つの方法である。たとえば、博物館をトータルとして理解してもらえるように、隠れた部分の<資料の調査・収集><研究・分析>の過程そのものを展示でみせてはどうか。この趣旨のもとに行ったのが、このたびの「モノから学ぶ～博物館のおもしろ実験展～」であった。‘博物館の舞台裏を見せる’という点にねらいを据えたのである。

結果的には、展示で十分に表現できなかった点もあったが、「モノを復元する、見せる」のコーナーでは、日ごろ公開することのない、土器・武具・絵馬等の復元過程をみてもらうことができた。成果品だけを並べるよりは展示が立体的になり、観覧者に博物館の日常業務の一端を伝える場ができたことは有意義であった。観覧者からの意見や感想も多く寄せられ、今後、もう少し工夫をこらせば、さらに主張の伝わる展示ができるとの確信が得られた。

ただし、予想していたより観覧者数が少なかったことには落胆した。博物館をとりまく環境には、いっそうきびしい現実があることを改めて思い知らされた。

博物館を考えるために

近年気づくことであるが、各地の博物館でこれまでにない趣向の展覧会が増えている。ちょっと行き過ぎではないかと思われるほど、くだけた内容のものも見受けられる。以前は、やはりオーソドックスな内容の企画が多かった。博物館の建設ラッシュが過ぎて歳月がたち、入館者確保のための特別展をやり尽くした感があ

る。ここにきて、どの博物館、学芸員もテーマの設定に苦心しているのではないかと思う。

学芸員は一つの企画（展覧会）を終えると、また新たなテーマを探さなければならない。一つのテーマで特別展示室（会場）が埋まるような企画が見つからなければ、落ち着いて他の仕事に取りかかれない。しかし、これを数回くり返すと必ずネタぎれにつきあたる。これをどのように乗り越えたら良いのか、またさらに大きな問題である。学芸員のプランナーとしての裁量が問われるところでもあろう。そのさい、同じモノを使っても、視点をかえ、見せ方をかえ、くくり方をかえて企画をするというのも一つの方法である。また、そうしなければ、学芸員の仕事の継続性や一貫性は確保できなくなる。

しかし、ごく少数の学芸員で年に数回も企画展を行っている博物館では、そんなことすら言ってられない状態にあるであろう。いまにも悲痛の声が聞こえてきそうだ。学芸員の数を増やすということは、いうまでもなく至難なわざである。

博物館を考えるために

最後に、展示ということについて述べておきたい。昨今の学芸員は、＜展示＞にもっとこだわりを持つべきではないかと思う。本来、学芸員はモノを扱うプロであり、そのモノをどのような展示構成、あるいは環境、手法等をもって見せることが良いのかを考究することが専門のはずである。展示物を安易に並べさえすれば良いというのでは、博物館に学芸員は不要であり、研究者と展示業者がいればことは足りる。博物館も名ばかりとなり、多目的なイベント施設と化すであろう。学芸員は良い意味で、展示にこだわりと誇りをもち、執念を燃やさなくてはいけない。ただし、独りよがりになるのは困る。いろいろな分野の人や観覧者の声に耳を傾け、つねに謙虚な態度をもち続けたいものである。

じつは、展示というのは、たいへん恐ろしい行為なのである。モノの見せ方・置き方やパネル等の配色・位置・ゆがみ、ケース内のゴミの有無、照明の強弱・角度などに、学芸員の精神がそのまま宿ってしまうからである。どれだけ展示に気を払っているかということをみれば、‘一事が万事’式に学芸員の日ごろの姿勢（調査・研究の態度）が読みとれてしまうわけである。

したがって、たいがい展示のあり方をみれば、その博物館、学芸員の内情やレベルはほぼわかってしまう。この点は、展示図録においても同様なことがいえる。学芸員にとっては、たいへん耳の痛い、きびしい話かも知れない。個々に置かれた立場や環境もちがうから、あくまでも一般論として受けとめてほしい。

博物館を考えるために

また、日本の自治体博物館では、展示品より解説パネルや品名プレートの方が目立つところが多い。モノを見るより、その背景（歴史）や意義・意味を学び、年代や名前を覚えることの方が大切というように、展示ケースにパネルやプレートが氾濫している。これでは、じっくりとモノを見る、あるいはモノから何かを感じとるというような環境とはいえない。

やや乱暴な言い方ではあるが、展示の原点は、やはり五感に訴えることであろう。パネルやプレートは、モノの展示の障害にならないように置かれるべきであり、主客転倒は避けたいところである。ましてや、小さな展示品の前に同等かそれ以上に大きなプレートが置かれては、展示は台無しである。また、個人差はあるといっても、観覧者がどれだけの文字を読んでくれるのだろうか、いささか疑問である。

ただ、展示の手法に関しては、まださまざまな意見・見解がある。当然、テーマによっては異なる考え方もできよう。しかし、もっと活発に意見交換を行うべきではないか。単にケースにモノを置けば展示ができる、という認識では、学芸員が自らの存在意義を放棄したも同然である。すでに行われている部分もあるが、いろいろな事例研究を行うなどのより積極的な活動が望まれる。そのさい、利用者にも呼びかけて、よりオープンな議論の場を設けることが大切である。

博物館を考えるために

今回は、さまざまな角度から博物館についてとりとめのないことを書きつづった。多くの方々に考えてもらうため、わざと強調して述べて部分があることは、ご理解いただきたい。

博物館をめぐっては、今後さらに熱い議論をつづける必要があろう。利用者のみなさんや同僚の学芸員、職場の方々からの叱正を受けながら、博物館の将来について真剣に考えてゆかなければと思っている。

（当館主任学芸員）

文字を記す、モノに記す

——瓜生由起

文字を記す

いまから約2000年前、中国から漢字がもたらされ、わたしたちの祖先はその時はじめて文字を知りました。時間と距離を超えて情報を発信し、受信するための手段を手に入れたのです。それは、コミュニケーションの可能性を一気に拡大し、人々の世界を大きくひろげたできごとでした。

とはいえ、当時は文字を読み書きできる層はごくごく少数でした。文字は、それ自体が力を持つとされ、最初は呪術的な意味合いを強く持っていたようです。やがて律令制のなかで事務の記録や通信のためにひろく文字が使われるようになると、文字は「道具」としての側面が強くなりました。文字を読み、書くことのできる層が徐々に広がったことは、都城跡だけでなく、地方の官衙跡や寺院跡などからも木簡や墨書土器が数多く出土していることからもうかがえます。中国から伝わった紙の大量生産が可能になると、文字を記す媒体は紙に移行しました。中世以降、大量の文書が作成・保管され、歴史の研究をする上で大きな手がかりとなっています。

同時に、文字は紙以外のモノにも記され続けてきました。土器、木製品、石製品、金属製品、繊維・・・多様なモノに文字は記され、残されています。

モノは、それ自体に豊かな情報を隠し持っています。製作年代、産地、製作地、加工技術など、モノ自体を調査・分析することで、わかることも多いのです（文書の紙も、同様にモノとして分析することができます）。

加えて、墨で書かれた文字、刻まれた文字、鋳込まれた文字、とモノに応じて方法もさまざまに記された文字は、モノ本体が持つ情報とともに、私たちにモノに文字が記された状況や背景についての情報を与えてくれるのではないでしょうか。

モノに記す

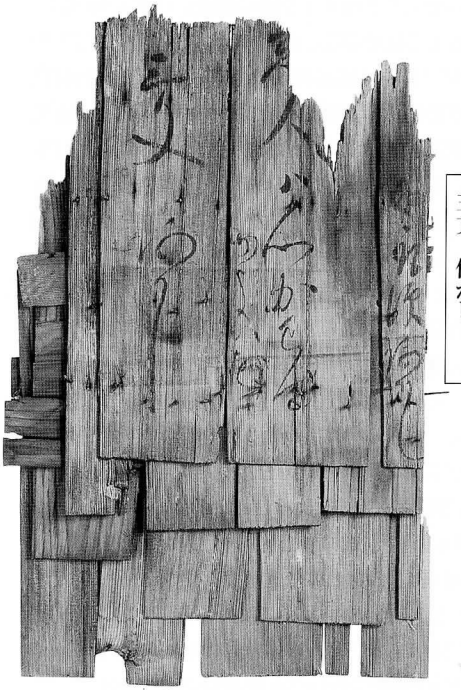
人は、何のためにモノに文字を記すのでしょう。

ここでは、大きく２つの場合に分けてみます。人が意図的にモノに文字を記す場合と、そうでない場合です。

意図的に記された文字にも、いろいろあります。まず、銘文を挙げます。モノに付随する情報を銘記し、残すために記されてきました。刀剣、陶磁器、石造物、瓦など、さまざまなモノに、製作者、製作年月日、製作地などの情報が書き込まれています（拓本①）。また、小丸城の瓦のような例もあります。瓦そのものについての情報ではなく、一向一揆に

道麻呂

写真① 上茨生田遺跡出土の墨書土器



□取次　何かし
□人ハ　心かわる
かよい花
三文　何かし

写真② 浄秀寺のこけら板

たいする前田又左衛門（利家）の成敗の様子を書き留めたものです（注１）。この場合は、情報を残すために、媒体としての特性（破損しにくい、腐敗しないなど）を備えたモノを選んで文字を記したわけです。これらは、その文字がモノと共に伝世し、時代を超えて伝わることを意図したものいえます。

つぎに、木簡や荷札のように情報の記録･伝達のため、あるいは古代の墨書土器にあるようにモノの所属を示すために文字が記されることもあります（写真①）。商工業製品に記される商標や工人名、屋号や印は、消費者に向けた宣伝の意味も持つでしょう。これらは、同時代の人々に向けた文字といえます。

ほかにも、文字が持つ呪術的な力に期待して、吉祥を意味する文字を記したり（拓本②）、絵馬や呪符のように、祈願や感謝、まじないのような意味で神や仏へのメッセージとする場合もあるでしょう。

さらに、意図的に記した場合以外についても考える必要があります。たとえば落書きは、明確な意図を持って書かれたわけではありません。しかし、落書きされたモノと文字は、その人の置かれた状況や背景を反映しているのです。文字の内容とモノの持つ情報を合わせて検討することで、その意味がくみ取れる資料だといえます。こうした資料の一例として、浄秀寺のこけら板を紹介します。

浄秀寺のこけら板

平成11年４月、武生市京町の浄秀寺では本堂の屋根瓦の葺き替えが行われました。瓦をはずすと、その下から板葺きの屋根があらわれました。さわらや杉の薄い板（こけら板）を何枚も重ねて葺かれた屋根で、一部の板に文字が書き込まれていました（写真②）。文字が読みとれるものは60点以上あります。本堂北側の軒の一角にかたまって葺かれていたそうです。

文字の内容は、習い書きや落書きが多く、板の両面に文字があるものや、一度書かれた文字の上に重ねて別の字を書いたもの、２枚以上並べた（葺いた？）状態で書いたと思われるものなどが含まれています。

こけら板を葺いた職人が書いたものと考えられますが、その文字のレベルはさまざまです。達者な仮名を書く者もいれば、お手本を書いてもらい、習い書きしていた者も見てとれます。

18世紀の半ばには、寺子屋が一般庶民の子弟に読み書きの基本を教えていました。とはいえ、通えなかった者もいたでしょうし、職人の修行に出てから、寺子屋で習った以上のことが要求されることもあったでしょう。こけら板に書かれた文字は、仕事の合間に職人の仲間同士、あるいは親方と弟子の間で文字を教え、習った様子がうかがえる資料だといえます。

また、こけら板と文字を細かく見ていくことで、屋根を葺く作業のどの段階で書いたのか、何人くらいが書いたのか、当時の武生の職人の読み書きのレベルはどの程度だったのか、文字が読める、書けるということが当時の人たちにどのような意味を持っていたのか、などを考えることができます。

今後も、こうした資料について、文字が記されたモノ、モノに記された文字という２つの視点を合わせることで得られる手がかりを読み解いていきたいと考えています。

（当館主査学芸員）

注１　小丸城出土の文字瓦

丸瓦の表面に以下の文字が刻まれている。

「此書物後世に御らんじられ／御物かたり可有候／然者五月廿四日／いきおこり其ま丶前田／又左衛門尉（殿）いき千人ばかり／いけどりさせられ候也／御せいばいはりつけ／かまにいられあぶられ候也／如斯　一ふで書とどめ候」

池上瓦屋／干寛政六甲寅三月上旬

拓本①　浄秀寺の獅子口（頂部）

福寿

拓本②　江戸後期の柄鏡（鏡背）

博物館 オリジナル絵馬グッズの紹介

新・夢楽洞絵馬

<肉筆>

驍

12号（塗装額入り） 6種類 各128,000円

福井県立博物館友の会

表紙解説

表紙は、本年３月に収集した元米国軍人旧蔵の写真コレクション（一部）。掲載した一群には、1945（昭和20）年７月の福井空襲とその被災状況が撮影されている。これらは、日本の警察や報道関係のカメラマンが撮影し、後に占領軍が空爆（爆撃調査）や民政関係の資料として接収したものと思われる。このたび、50余年の歳月を経て、撮影地である福井にようやく帰還した。

元米国軍人旧蔵
写真コレクションの特別公開

4月27日（木）▶5月21日（日）
県立博物館エントランスロビー（無料）

ふくいミュージアム
No.37 2000.3.31発行

FUKUI PREFECTURAL MUSEUM

編集発行
福井県立博物館
〒910-0016 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675(代)